

根本利通 著

『スワヒリ世界をつくった「海の市民たち」』

(昭和堂、2020年)

評者 鈴木 英明

本書は2017年にダルエスサラームで急逝した著者によるスワヒリ世界やインド洋西海域世界の歴史を題材とする18本のエッセイを集め、1冊の本にまとめたものである。著者は京都大学文学部卒業後、高等学校で6年間、教鞭を執ったのち、1984年にタンザニアへ渡り、ダルエスサラーム大学の大学院に入学、その後、旅行会社を立ち上げ、通算32年間、タンザニアに根を下ろし活動してきた。

書名にあらわれる「海の市民たち」という概念は、「あとがき」を記した辻村英之によれば、国家や大企業主導のグローバル化に対抗する、スワヒリ社会の民衆によるモノやヒトの自律的交易・交流を基礎とする内発的な発展のあり方を検討する基礎概念として著者が位置づけていたものである(p. 251)。ここからも仄かに感じ取れるように、著者は社会運動家としての側面を常に携えてタンザニアで活動を展開してきた。大学院を中退したのちに立ち上げ、生前、一貫して携わった旅行会社では、一般的なツアーの企画・手配に留まらず、学術研究調査やテレビ番組の取材のコーディネーターを務めることも少なくなかった。それだけに留まらず、観光客がそこで暮らす人びとと触れる機会もなく、一方的に現地の観光資源を収奪して帰っていくような旅行のあり方に対して、ツアー参加者から供出金を募り、それで訪問する村の小学校に児童用図書を寄付する仕組みを作るなどして、ツアー客の意識改革を促すようなオルタナティブ・ツアーを企画し、市民レベルでのタンザニアと日本の交流の礎を築いたり、あるいは、著書や自身の会社のホームページのコラムなどを通して、日本に向けてタンザニアやスワヒリ世界の魅力を日本に向けて発信したりしてきた。児童用図書の寄付先となったルカニ村では、その活動がコーヒーのフェアトレードによる図書館や中学校建設に対する支援、日本の政府開発援助とも接合していくことで、この村の子供たちの教育水準が引き上げられていった(p. 249)。また、著者の立ち上げた旅行会社JATAツアーズのホームページ(<https://www.jatatours.com/>最終確認日2020年12月27日)には、そうしたツアーの参加者や同社でインターンをした学生の体験談などが掲載されており、それらからは著者の目指したとされる市民レベルでの対等で双方向的な交流のあり方を感じ取ることができる。

このような「ソーシャル旅行者」である著者はインド洋西海域の海を跨ぐ交流のなかにスワヒリ世界の歴史を位置づけながら理解しようとする「ソーシャル研究者」(p. 249)でもあった。著者が生前、夢見ていたという「東アフリカ沿岸から見た世界史研究」の完成(p. 251)のあかつきには著書が刊行されるはずだったが、急逝した著者にその時間はなかった。没後、彼の「運動の仲間」(p. 251)が、その意図をくみ取り、生前、彼が上述のホームページなどに書き溜めてきた文章を編纂したというのが本書の成り立ちである。本書は

広くいえばスワヒリ世界を中心とした歴史紀行といえるだろう。しかし、本書の価値をそこに留めないのは、ひとつに採録されたエッセイの時空間の広さである。各エッセイに付される日付は、古いもので著者がタンザニアに本格的に腰を据えた1985年、最新のもので亡くなる直前に書かれた2017年と著者のタンザニア生活がほぼすっぽり収まり、また、本書に登場する著者の訪れた地名も、スワヒリ海岸についていえば、北はモンバサ、南はモザンビーク島、内陸にはタンガニイカ湖畔のウジジ、タボラまで、加えて、海を跨いでマスカトといった具合である。本書から浮かび上がる時空間は、タンザニアで草の根の活動を行い、そこにしかと根を張り巡らせながら、まさにスワヒリ海岸からインド洋西海域世界そのものに向け続けた著者の目に映り込む眺望そのものを表しているかのようなのである。

本書の別の特徴は、紀行文が往々にして一度限りの訪問を記す場合が多いのに対して、著者は同じ場所をたびたび訪れ、章を跨いで登場人物やその家族が登場する点である。特に第1話から第3話にかけてのマスカト初訪問とそこから28年経た2度目の訪問、その2年後の3度目の訪問は、それらがふらりと訪ねたのではなく、それぞれタンザニアでできた伝手をたどっての旅であり、それ自体がインド洋西海域世界を体現するひとつの物語となっている。第1話で登場した家族が成長し、第3話で著者を案内するという物語は、草の根交流を提唱・実践してきた著者の真骨頂の一端をあたかも垣間見たかのようなのである。また、著者が「ソーシャル研究者」と同時に「ソーシャル旅行者」であった点も本書でしばしば伺えるところである。そこからはタンザニアにおける観光業のあり方がちらちらと見えてくる。著者の持つ研究者と旅行者というふたつの属性は「社会運動」という点において接合し、それが現在と過去との往還を著者に自在に、足取り軽く行わせている。評者はそこに本書の最大の魅力を見つけ出した。

たとえば、世界遺産に指定されたことで容貌を変えていくキルワ・キシワニの姿や現地案内人によるアラブ人と奴隷商人とを同一視する語りに対する懐疑的な眼差しなどにそうした足取りの軽さを見出すことができる。もちろん、「足取りの軽さ」が軽薄を意味するのでは決してない。むしろ、過去の実態を知りたいという歴史研究者としての願望やそれに支えられた探究の結果としての知識と、仮に説明が歴史的事実とされるものとそぐわなくても、そのように語ってしまう、あるいは、語らざるを得ない現在を生きる案内人に寄り添おうとする願望、また、長いタンザニアでの生活や旅行業に携わるなかで得た知見、それらがあってこそ初めて可能になる軽やかさなのである。しかし、過去と現在、自己を含めた多様な人びとの現実と理想、それらが混じりあうことで、足取りこそ軽くとも、足音は常に柔らかで軽くはなく、むしろ、時として硬く重いように感じ、読みながらはっとさせられることが幾度かあった。

このような一見、矛盾するような筆致は、評者が著者に一度だけ対面した時の印象とも重なり合う。評者は港町を題材とする歴史学の科研の巡検でスワヒリ海岸に赴いた際、巡検旅程の作成を担当し、その際に著者の旅行会社に世話になったことがあった。ダルエスサラームのインド料理屋で巡検参加者とともに著者を交えて会食したのだが、柔和な表情を絶やさず、飄々とした一方、どこか毅然とした佇まいというやはり一見、矛盾した印象を抱いた。本書を一読して気が付くのは、その時に感じた毅然とした印象が表題に含まれ

た「市民」という言葉と関係するのではないかということである。政治権力による押しつけの共同体ではなく、政治権力とは対極的に位置づけられ、なおかつ自律的で創発的な「民衆」の集合体が「市民」だとすれば、著者はその一員としての自負を持ち続け、そして、その展開の可能性を、歴史的に政治権力による支配からかなりの程度自由に人びとがインド洋西海域の海を往来し、そうした往来を重要な要素として形成されていったスワヒリ世界のしなやかな歴史過程に見出そうとしていたのではないだろうか。しかし、著者がタンザニアに定着した1980年代半ばから始まる構造調整や急速な観光化に代表されるグローバル化のなかで、時として、スワヒリ世界が培ってきたしなやかさは影を潜めるようであり、それは著者の往還の足音を硬く重くもする。しかし、それでも軽やかに往還を続けるのは、著者を支える「市民」としての自負なのであり、インド洋西海域の交流のなかで培われたスワヒリ世界のしなやかさに「市民」の未来への可能性を強く見出していたからなのではないだろうか。

冒頭で述べたように、本書は著者自らではなく、その「仲間たち」によって編纂されている。すでに紹介した辻村による「あとがき」のほか、伊谷樹一による「刊行に向けて」が冒頭に、そして、著者が2002年から2016年まで毎月記録していたダルエスサラームの生活品の価格動向を伊谷と多良竜太郎がまとめ、解説を付した付録がつけられ、巻末には著者の伴侶であった金山（根本）麻美によるお礼が収められている。これらは本書の位置づけを読者に理解させるうえで重要である。また、詳細な地図と豊富な写真も本文の魅力を引き立たせている。

以上、本書の評を進めてきたが、本書に問題がないわけではない。著者に起因するだろう事実関係の誤解や参照すべき文献が記されていないなどの点はこの際、措いておくとして、せっかく一冊の書籍としてまとめるのであれば、誤記については手直しをするべきだったろう。スルタン・バグラッシュ→スルタン・バルガシュ（112頁）、村田訳→村川訳（201頁）はその一例である。

本書に収められたフィールドワークを経て、自らの「市民」像を踏まえ、もし著者が「東アフリカ沿岸から見た世界史研究」を完成させられたならば、それはどのようなものになっていたのだろう。各エッセイはどれも紀行文として魅力的で、しばしば立ち止まり考えさせられるが、この点についての全貌は明らかではない。おそらくはフィールドワークを重ねながら、日々を生きながら、著者は心のなかでそれを温め続けていたのだろう。それを得ることのできないのが至極残念である。本書はスワヒリ世界やインド洋西海域世界を知るためのみならず、フィールドに根を下ろし、そこで日常を生き抜きながらどのように未来を展望していくのか、そのことを試みた研究者の記録としても広く読まれたい一冊である。

■ 評者紹介

- ①氏名(ふりがな): 鈴木 英明(すずき ひであき)
- ②所属・職名: 国立民族学博物館グローバル現象研究部・准教授
- ③生年と出身地: 1978年、東京生まれ
- ④専門分野・地域: 歴史学、インド洋海域
- ⑤学歴: 学習院大学文学部史学科卒業、慶應義塾大学大学院文学研究科前期博士課程史学専攻修了、東京大学大学院博士後期課程アジア文化研究専攻西アジア歴史社会専門分野博士後期課程修了。
- ⑥職歴: 東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センター事務補佐員、日本学術振興会特別研究員DC2、日本学術振興会特別研究員PD(受け入れ機関: 財団法人東洋文庫)、日本学術振興会海外特別研究員(受け入れ機関: マギル大学)、長崎大学多文化社会学部准教授、国立民族学博物館助教を経て現職。
- ⑦現地滞在経験: 大学生の頃より、インド洋海域の様々な場所を訪問してきたが、通常、滞在期間は2週間から1か月程度である。文書館調査も大体2週間程度が集中力も切れず、適当だと思っている。
- ⑧研究手法: 基本的には文献を用いた文献史学になる。ただし、聞き取りや参与観察も不十分ながら行っている。フィールドワークで得た知見を前面に出した研究成果はまだ出せていないが、そうした知見というのが文献の読解を助けてくれたり、あるいは、おそらく文献だけに接するだけでは出てこない発想をもたらしてくれたりすることが少なからずあり、その点でもフィールドと文献の往還は今後も続けていきたいと思っている。
- ⑨推薦図書: 薮勇造『エリュトラ海案内記』全2巻、平凡社、2016年。